



ダリマナ

校長室日記

～ 南の風 ～

かいっぱい

令和元年 11月15日 (金)

第120号

《 武勇伝③ 》 「安倍川の石合戦」 徳川家康 ～幼少から持っていた洞察力～



長い間続いた「戦国時代」を終わらせて、平和な「江戸幕府」を開いた徳川家康は、子どもの頃から物事を見定める力を持っていました。これは、家康が9才の頃、まだ「竹千代」と呼ばれていた頃のお話です。駿府(静岡)にある、安倍川の土手で、子どもたちが赤白二組に分かれて石合戦をしていました。石合戦とは、石を投げ合ってどちらが強いかな勝負することです。これを見ていた竹千代に、家来の一人が尋ねました。

「竹千代さま。どちらが勝つと思いますか？」

竹千代は、赤白両方の組をじっと見つめたまま、しばらく考えました。

「教導立志基」(1883年) 「うーむ・・・。」

すると、別の家来が竹千代に言いました。

「竹千代さま、赤になさいます。赤は百人で、白は五十人です。昔から戦とは、数の勝負です。数の多い赤が、勝つに決まっています。」

しかし、竹千代は首を振って言いました。

「いいや、勝つのは白だ！」

竹千代が、自信ありげに言うので、家来たちはびっくりです。

「竹千代さま、なぜ白が勝つとお思いですか？」

すると、竹千代は家来たちに説明しました。

「確かに数は、赤が多い。だが、赤の組をよく見てみる。赤の組は大勢という事に安心して、半分が遊んでいる。残りの半分も、さほど真剣に戦おうとはしていない。一方白の組は数が少ないため、みなが真剣に戦おうとしている。勝つのは、白の組だ！」

「うーむ、そんなものでしょうか？」

竹千代の説明を聞いても、家来たちは首をかしげていました。

「合戦、はじめい！」

合図の太鼓が鳴りひびいて、石投げが始まりました。すると、どうでしょう。数の少ない白の組がかかんに攻め込み、まさか負けることはないとのんびりしていた赤の組が、バラバラと逃げ出したのです。

「なんと！本当に白が勝った！」

家来たちは、竹千代の物事を見定める力に感心しました。

「さすがは、竹千代さま。まだお小さいのに、よくものを見ておられる。まこと。このまま大きくなれば、いつの日か天下を治めるかもしれん。いやきっと、天下を治めるだろう。」

家来たちの言葉通り、やがて竹千代は天下人となったのです。



「偉人繪話」(1940年)

